

川辺のSUMIKA

敷地は、施主に案内されて菊川市を流れる川の土手を歩いて向かった。

その土手は、人々にとっての毎朝晩の散歩コースのようだ。

ゆるやかに流れる川に戯れる鳥たちや昆虫、土手際に生息する草花、さらには川の上流先に見える山々。

こんな豊かな周辺環境と共に暮らせる住まいへの期待感が沸いてきた。

敷地は、そんな川土手と道路とに挟まれた、三角形の細長い土地の一部であった。

しかし、川土手を下って敷地に立つと、そこは土手の斜面と近隣の家々しか見えない。

土手との高低差により、さっきまで目に映っていたものすべてが土手で遮られているのだ。

ほんの少しの居場所の違いが、環境の変化に大きな影響を及ぼすということを考えさせられた。

周辺環境というのは住まいにとってベースであり、ゆるがない条件であるからこそ、それらをスタンダードにとらえ、

そこに建つ住まいとして密接な関係性を築いていく必要がある。

川辺のSUMIKAは、そんな川辺に住まう家として周辺の理解から始まったのである。

川土手と敷地との高低差は、約3mほど。

細長い敷地にとって3mの高低差は少々圧迫感があったが、3mという値は建物の階高設定にはちょうど良い高さ関係だったため、おのずと2階建ての計画を想定した。

また、駐車計画と建物の配置計画を考えた結果、土手側に建物を配置する計画を考えた。

そもそも、景観を楽しみたいという意図を活かすために、LDKを2Fに配置するという考えのもと、

土手際に建物が寄ることで、2Fは周囲との距離感が近くに感じられ、より開放感を得ることができる一方、

プライベート空間が集約するであろう1Fは、土手との高低差を周囲からの視角操作として余分なスペースを縮めることで、よりプライベートの確保を図った機能的な空間を得ることができるだろうと想像したからだ。

だが、景観というスケール感を無造作に受け入れるのではなく、受け入れるべきものだけを空間に反映する必要性を感じた。

建物は、川土手に平行な敷地の一边を最大限に使って景観と接する面積を大きくするが、

建物の先端を平面的に絞り、開放するべき部分も絞る先に焦点を合わせ、必要な景観のみを空間に受け入れることで、開放的であるにも関わらず、額で切り取られたかのような開口は落ち着きのある開放感へと変化したのだ。

もう一方、川土手の辺とは反対の道路側は、住宅街と向き合うために開放する必要性が感じられなかったため、

土手側の辺と対称的な辺をもって一切の開口を設けず、閉鎖的な様相をつくり出したのだ。

このような形で、二等辺三角形を成した平面構成が生まれた。

二等辺三角形という平面は、四角形の構成より辺が少ないため、二等辺という部分を利用して一边を閉鎖的に、

もう一边を開放的にといった、住空間の在り方に明確な意味をもたらすことができた。

さらに、よりこの明確な空間を壁を境にした内と外との関係性や意味を強調するために、

外壁は樹脂モルタル金縷で仕上げを施し、周辺環境との調和や落ち着いた質感を表現し、

内壁は白の塗装仕上げとし、周辺環境を自然に包容したシンプルな質感を表現した。

内外共に無機質な表情であるが、内外の仕上の変化は建物の在り方や空間の在り方にメリハリをつけ、

主張性のある存在を構成することができた。

これらすべて、周辺環境と向き合った結果必然的に導かれた答えであり、もとよりある自然の豊かさに加えた暮らしの豊かさを守られた住まいとなるであろう。

川辺に住まう家として、このようなSUMIKAがあっても良いのではないかと納得できる、心地よい建築といえる。